

# 奨学金留学生事業 留学成果報告 (学部・修士・博士)

## コンフォートゾーンから抜け出そう

東京大学工学部 4年 王凱

日本留学を一言で表せば、「コンフォートゾーンから抜け出して初めて変化が生まれる」だろう。5年前に渡日してから、私は様々な挑戦に向き合い、多くの不可能を可能に変えた。そして現在、大学生活を経て、人間としても技術者としても大いに成長したと感じる。

日本に興味を持ち始めたのは、高校の頃だった。日本のアニメとドラマに惹かれ、内容を理解するために日本語の勉強を始めた。また、日本は人工知能とロボット技術において世界の最先端に立ち、その開発に携わっている研究者達が憧れだった。当時の自分にとって、日本留学が両方の好奇心を満たせる最適な選択肢だったが、生活と経済的な面を考えれば夢のような話だった。しかし、日本台湾交流協会のおかげで、奨学生として日本で大学生活を送る機会を得た。コンフォートゾーンから抜け出す一歩として、私は生まれ育った土地を離れ、日本留学に挑戦した。

留学最初の日本語学校生活は、わくわくと挫折

に満ちた。季節の変化や異なる食文化など、何もかもが新鮮な一方、教科書の知識では対応できない場面にもよく遭った。この失敗の繰り返しを乗り越えられたのは、奨学生仲間の支え合いと東大合格の目標があったからだ。異国で共に夢を追いかける仲間は自分にとって安心させるような存在であり、モチベーションでもあった。そのため、失敗の度に立ち直って勉強し、日本生活にも徐々に慣れた。そして瞬く間に皆が日本語学校の卒業を迎え、それぞれの志望校に進学し、私も東京大学に入学することになった。

一年生の私は新しい体験を幅広く経験した。大学のトライリンガルプログラム、スポーツ系サークルの活動、碁会所のアルバイトなど、自身の趣味と強みを活用しながら、改めて多様な視点から日本を知った。特に印象深かったのは、碁会所では接客を覚えただけでなく、囲碁をきっかけに世界中の人々と繋がったことだ。日本人とでも、海外の方とでも、囲碁といった共通の関心を持っていれば異文化交流が始まると深く実感した。

残念なことに、二年生の頃にコロナ禍が始まり、サークルとアルバイトは辞めざるを得なかった。その上、大学の講義が全てオンライン化した。最初は慣れないため、講義に集中できず、有り余った在宅時間も有効利用できなかった。しかし、オンライン化をきっかけに、大学側がより効果的な授業形態の開発に工夫を入れ、従来の教育システムに革新をもたらした。また、在宅時間の増加を機に、自分を省みて理解を深め、自ら多様な物事に挑戦することができた。例として、プログラミ



語学力と特技を活用し、日本文化に興味を持っている海外の方向けに英語による囲碁レッスンを行う。

ングに触れ始め、ソフトウェアを活用したものづくりという趣味を見つけた。

三年生の際に機械系に進学し、本格的なものづくりの勉強を始めた。まず、工学演習では5人の班でスターリングエンジンという熱を動力に変換する機構を設計、製作した。班員とは図面越しでコミュニケーションをとる必要があったため、美術が苦手でも正確かつ丁寧な設計図の描き方を覚えた。次に、プロジェクトマネジメントスキルを身につけるために、科学技術を活用した社会問題解決を目指す自動車安全技術開発プロジェクトに参加した。問題定義から解決策考案、機構設計と実装まで行い、実践からシステムの築き方を一通り学んだ。最後に、同級生に誘われ、大学生活をより便利にするアプリ開発に携わった。皆が未経験のため、プログラミング勉強会を開きつつ、試行錯誤を繰り返して成果のアプリを作り上げた。他にも多く実践から本来持っていなかったスキルを身につけた。これらの経験から、努力は不可能を可能にすると深く実感した。

その後、四年生になり、研究室に配属された。私は人工知能を詳しく勉強したいため、機械学習をメインにする研究室を選んだ。卒業論文のテーマとして、ヒューマンコンピュータインタラクションの円滑化のために、機械に人間らしいユーモアの使用を学習させる研究を行った。英語の論文



自動車安全技術開発プロジェクトで開発した「速度超過防止のためのシミュレーションシステム」。

を読むことも、発想をプログラムにすることも最初は困難だったが、先生と先輩方の指導のおかげでコツを掴み、1人でもできるようになった。また、研究者デビューの挑戦として、国際学会に卒業研究を投稿し、努力の成果を世界中の研究者達に共有した。

日本留学の初めから現在まで様々な困難に直面し、周りに助けてもらいながら乗り越えてきた。挑戦に満ちた道を歩み続けたからこそ、留学前と比べて自分が大いに成長したと考える。そして今後も、自分に新たな挑戦を与え続け、より良い社会に貢献できる人工知能を開発する研究者になりたい。

## コロナがりながら納得のある自分へ

私は筑波大学大学院で日本語教育、社会言語学などについて勉強しており、修論は東京都小池知事の発言を取り上げて、コロナ禍における行為要求表現をテーマにした。今後は日本の会社で働く予定だ。

研究生生活を振り返ったら、大きく研究生、修士1年、修士2年、と3つの時期に分けられる。日本に留学しにきたのは2020年4月で、ちょうど新型コロナウイルスの感染が世界的に増加し始めた頃だった。日本台湾交流協会のおかげで、ようやく日本に留学することができたのに、学校に行くことすらできず、研究生時代は毎日オンライン授業の「避難生活」だった。

筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 修士2年 熊珮安

半年後に大学院入試に合格することができ、翌年修士1年生になった。少しずつ同級生やゼミの仲間と交流することができ、「文化と研究の刺激を受ける毎日」だった。私が所属している小野ゼミではウズベキスタン、ベトナム、マダガスカル、ブラジルなど世界各国からの留学生が集まっており、毎週のゼミでは異なる国や地域の日本語教育概況を聞くことができる。また、ゼミ生との自分の国についての雑談が面白くて、例えば、ウズベキスタンでは国際女性デーには男性から母や妻、娘に花やプレゼントを贈る日だそうだ。結婚式は親戚の親戚、友達の友達まで参加することなど、日本と台湾では聞いたことのない話だ。日本に留

学しにきたが、日本以外の国の留学生との交流もできて、視野が一気に広がった気がする。

また、先生、同級生、ゼミ生が私の研究に大きな影響を与えてくれた。最初に考えた研究は「とすれば・とすると・としたら」という接続詞の共通点・相違点についての研究、言い換えると「ザ・言語学」のような古いテーマだった。しかし、所属している国際日本研究学位プログラムには、言語学だけではなく、日本の外国人児童や技能実習生の日本教育問題を取り込む研究や、地域のコミュニティについての研究、またはアメリカ人の雑談、ポストに書いた表現を探究する研究など、広い視点でこの社会と緊密に関わる面白く多彩な研究をなされる方が多くいる。このような環境の中で、私はもっと「面白い」研究をしたい、この世界、この社会にもっと関わりのある研究をやりたいと思うようになった。この一步を踏み出したのは修士1年生の最後の構想発表の直前だった。一から研究を考え直す不安と怖さがあったが、自分の納得できる面白い研究をしたいと思い、何回も相談と再考を繰り返したうえで、小池知事の記者会見での発言を対象としたらいいのだと閃いた。その後は中間発表を経て、研究の形を固め、修士2年の後半に新しいテーマで論文を執筆し、最後は指導先生からも副査の先生からも高い評価をいただき、優秀論文賞を受賞できた。

研究以外では、私は日本語の家庭教師、TA、留学生のチューター、日本台湾交流協会の関東地域の留学生交流会の実行委員も担当していた。中でも、交流会の実行委員の業務が最も特別な経験だった。コロナ禍で、他の奨学生との対面の交流は長い間全く実現できなかったが、日本台湾交流

協会の提案のおかげで対面交流会を開催することができた。6人の実行委員は皆会ったことがあるかないかの仲だったが、オンラインで交流会の話を進めた。最初はお互い遠慮がちだったが、だんだん各自自主的に役割分担をして、互いに協力しあった。皆の前でリードすることが苦手な私は主にレストランとの交渉を担当した。時間の予約、メニューの調整など、初めて大人数の予約の打ち合わせに挑戦した。また、一度コロナの感染状況が深刻になり、交流会の開催が延期になった。不測の事態だったが、予約やスケジュールのやり直しなど皆で力を合わせて調整をした。当日は想定したスケジュール通りに進行でき、皆が楽しく参加することができた。この光景を見て、ものすごく達成感を感じ、この5人と一緒にやってよかったと思った。また、この交流会を通じ、これからも一緒に日本で奮闘する仲間ができ、心が強くなった気がする。

この3年間の留学生活は、日本だけではなく、他の国や地域の留学生との交流もできた。また、研究だけではなく、課外活動からも色々な経験を積んでいた。この全てを実現できるのは日本台湾交流協会のおかげだ。「日本に恩返しを！」という思いをもとにして、もっとこの社会に貢献したいと思い、将来は社会人の一員となり、日本と世界のインフラ全般に携わる会社に就職することにした。また、留学経験から培った「変えられるものを変える勇気」、「異なる文化背景を持つ人とコミュニケーションできる能力」を活かし、日本と台湾だけではなく、日本と世界との架け橋になれるように精進する。

## 日本留学生生活を振り返って

思い起こせば、日本留学を決めたのは、台湾での大学院入試に寝坊してしまったからです。今まで父の呆れ声を幾度となく浴びてはきましたが、あの時の声を思い出すと、なんだか、しょっぱい気持ちと父とは対照的に自分事なのにけろりとしていた過去の自分に対してジワジワと笑いがこみ上げてきます。

日本大学大学院 獣医学研究科 博士4年 鄭傑仁

元々日本には興味があり、専攻していた獣医学の面においても先進国であったため一念発起し日本語を基礎から学び義務兵役を済ませ2018年4月に来日しました。外国人留学生で実質無職だったので、家を借りる段階から少し苦労しましたが、幸いにも大学院付近の親切な不動産屋が部屋を貸してくださり何とか生活を始めることができました

た。学業の面においては、まず研究生として研究室に所属し6月にアメリカのシアトルで行われたACVIM Forum (米国獣医内科学会)に参加しました。その際、獣医学の教本の著者など獣医師界の権威である先生方や他国で同じ心臓外科を研究しているチームとも意見交換する機会が持てたため見識が広まりとても有意義な時間を過ごすことができました。またプライベートでも、Facebookで偶然見かけた静岡県下田市観光協会主催の外国人リポーターに応募し当時の留学先であった神奈川とはまた一風違う雰囲気土地を訪れ、現地の方たちと交流することができました。母国では自ら積極的に話しかけ雑談するといったことは苦手でしたが、日本に住み始めてから不思議とその苦手が得意に変わった気がします。

そこから大学院入試に合格し少し時間はかかりましたが翌年3月から本格的に大学院生としての生活が始まりました。しかし、新学期が始まる直前に指導教員が辞職することとなり、当初考えていた研究テーマを考え直さなければならない事態に陥りました。時間も限られていたため気持ちを立て直し、なんとか新たな実験計画の作成や下準備に取り組んでいましたが、日に日に元気がなくなっていく自分に気づき、勇気を出して現教授に相談をしてみました。すると、ありがたいことに籍を今の大学に置いたまま、元々やりたかった研究が実現できる環境が整っている大学に研究場所を移すという形を取らせていただくことになりました。

研究場所を移ししばらくしてコロナ禍に突入り紆余曲折ありましたが、その後なんとか元々取り

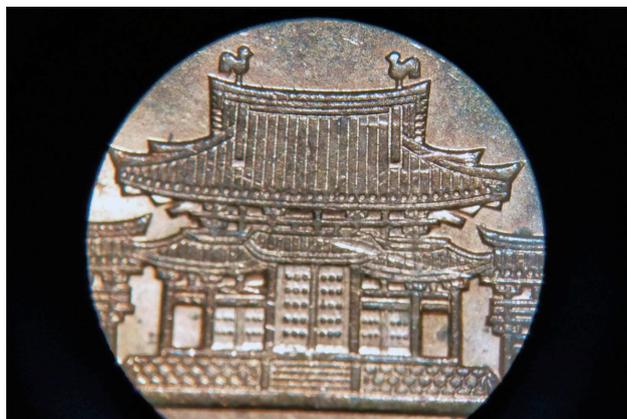


1854年ペリーの黒船が来航した静岡県下田港の様子。

組みたかったテーマで研究を継続する事ができ、その傍らオンラインでアメリカの獣医外科学会2021 ACVS Surgery Summitへの参加や獣医学でトップレベルの専門誌であるJournal of Veterinary Internal Medicineに論文を採択されるなど成果を上げることができました。思い通りにいかなかった事が本当に多く何度も心が折れましたが時々食べる美味しい寿司と銭湯、そして四季折々の美しい景色に癒され、周りの先生方、友人と交流協会の担当者様のサポートもあり、おかげさまでなんとか今日まで日本での生活を送る事ができています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。異国の地で自分ひとりの力では何もできません。何かに絶望した時は元々の目標を思い出し、遠慮なく周りの人に相談し、物事の捉え方を変え突き進んで行く事が重要だと日本での生活を通じて学びました。私自身まだまだ人生の道半ばですので大分先の話にはなりそうですが将来的には後輩たちに助け船を出せるような人間になりたいです。



米国獣医内科学会ACVIMに参加した頃はまだ痩せていた。



普段何気なく使っている10円玉の手術顕微鏡下の様子。よく観察すれば平等院の上の鳳凰も緻密に彫り刻まれている。